

令和元年6月16日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02274

研究課題名(和文) 20世紀前期日本近代文学における内務省・GHQ検閲の比較研究の国際的展開

研究課題名(英文) The International Development of a Comparative Analysis of Home Ministry and GHQ Censorship as it Relates to Japanese Literature in the First Half of the Twentieth Century

研究代表者

十重田 裕一 (TOEDA, Hirokazu)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：40237053

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀前期日本近代文学における内務省・GHQ検閲の比較研究の国際的展開を目指し、当初の研究目的を達成することができた。アメリカ合衆国やカナダなどの研究・教育機関に出張し、ゴードンW. プランゲ文庫の資料調査と研究成果の発表を重ねながら研究を展開した。帝国日本で行われていた内務省の検閲と占領期日本で実施されたGHQ/SCAP (General Headquarters / Supreme Commander for the Allied Powers、連合国軍最高司令官総司令部) の2つの検閲に関する新資料を収集・整理し、学術論文・著書を多数発表し、新たな研究の国際的な基盤を形成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究が学術的・社会的な側面からみて意義があると考えられるのは、20世紀前期日本近代文学における内務省・GHQ/SCAPの検閲を比較・検討しながら、異なる二つのメディア規制と文学とのかかわりを解明する点にあった。その際に、新聞・雑誌などの定期刊行物や単行本などの出版物と、記者や編集者などとの関連を重視しながら、内務省・GHQ/SCAP検閲と文学との関連を具体的な事例に基づいて総合的に分析をするという手法をとった。得られた研究成果は、国内外に積極的に発信し、内務省・GHQ/SCAPの検閲に関する研究の国際的展開をはかることができた。

研究成果の概要(英文)：In this research project, I was able to fulfill my original objective of advancing international comparative work on Home Ministry (Naimusho) and GHQ censorship in early 20th century Japanese literature. Traveling to various research and academic institutions in the United States, Canada, and more, I presented on the results of the archival work I conducted in the Gordon W. Prange Collection and further developed my research. I collected and organized new materials related to censorship under the Home Ministry in imperial Japan and under GHQ/SCAP (General Headquarters / Supreme Commander for the Allied Powers) in occupied Japan, published a number of scholarly articles and books, and formed international bases for new research.

研究分野：人文学

キーワード：日本文学 検閲 内務省 GHQ メディア 出版

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本近代文学における検閲への関心は、日本国内外を問わず、年を追うごとに強い関心を持たれるようになってきた。しかし、内務省と GHQ/SCAP (General Headquarters / Supreme Commander for the Allied Powers、連合国軍最高司令官総司令部) による検閲と文学を比較・検討し、歴史的・社会的視点から総合的に考察する本格的な研究はまだ十分には発表されていなかった。本研究の目的の一つは、研究開始当初のそうした状況を変えるべく、異なる複数の検閲の特色を比較・検討し、新たな研究成果を発表することで、当該研究を着実に進展させることであった。

### 2. 研究の目的

本研究は、20 世紀前期の日本近代文学を対象に、出版社・新聞社などマス・メディアによる検閲の歴史的な特色を解明するため、第二次世界大戦前から戦中にかけて実施されていた内務省の検閲と、戦後占領期日本の GHQ/SCAP 検閲を比較・検討していくことを目的としていた。これまで、日本近代文学における検閲の研究は、内務省と GHQ/SCAP のいずれかを対象とするものが多かったが、本研究では二つのメディア検閲に関する新しい資料を収集し、両者の差異と一致、あるいは相互の関連を考察することを重視した。そして、その成果を国際的に共有するべく、日本国内外で積極的に発信することを通じて、国内外の関心に応えることを目的とした。

### 3. 研究の方法

内務省の検閲と戦後日本の GHQ/SCAP 検閲の相互関連性を研究するにあたって、異なる二つの検閲に関連する資料が不可欠であった。したがって、内務省検閲については、日本国内で資料収集をし、GHQ/SCAP 検閲については、アメリカ合衆国メリーランド大学図書館プランゲ文庫所蔵の占領期刊行の文芸書の調査と検閲文書の資料収集を行った。二つの検閲にかかわる基礎資料集を作成し、文芸に対して行われた異なる検閲の関連を考察した。その際、海外の優れた研究者との議論を定期的実施することで、研究の水準を高めると同時に、研究成果を日本国内外で発信するという方法をとった。

### 4. 研究成果

本研究は、20 世紀前期日本近代文学における内務省・GHQ 検閲の比較研究の国際的展開を目指して進められ、当初の研究目的を達成することができた。研究期間内に行った著書の刊行や研究発表などを通じて、着実な研究成果へと結びついている。途中、急病で長期入院という不測の事態が発生したことより研究期間を一年延長したものの、前倒しで研究を進めていたため、研究の進捗状況はおおむね順調であった。また、研究成果に基づく講義を、客員教授として赴任した米国スタンフォード大学大学院、中国清華大学大学院で実施するなど、研究成果を国内外における教育に還元することもできた。以下に、主たる研究成果の概要を経年的に示す。

2016 年度は、総じて、研究の進捗状況は順調であり、前倒しで研究成果を公表することができた。当該年度の主たる研究成果のうち、活字発表をいかに示す。『旅愁 上・下』(岩波書店、2016 年、上巻 pp.1-579、下巻 pp.1-656) 収録の解説「引き裂かれた「旅愁」の軌跡」(上巻 pp.561-579)、「占領期メディア検閲と横光利一『旅愁』 プランゲ文庫所蔵の校正刷からの視点」(『文学』第 17 巻 6 号、岩波書店、2016 年、pp.276-290)、「占領期日本の検閲と川端康成の創作 「過去」「生命の樹」「舞姫」を中心に」(『川端康成スタディーズ 21 世紀に読み継ぐために』笠間書院、2017 年、pp.193-203) などである。岩波文庫『旅愁 上・下』は、内務省・GHQ の検閲によって本文が書き換えられた小説「旅愁」の本文を復元し、書き換え前後の異同表を示すことで、今後の研究の基盤を形成した。「占領期日本の検閲と川端康成の創作 「過去」「生命の樹」「舞姫」を中心に」を収録する『川端康成スタディーズ 21 世紀に読み継ぐために』においては、編者もつとめている。また、当初想定していたよりも早い研究成果として、『岩波茂雄文集 全 3 巻』(岩波書店、2017 年)を刊行した。戦前～戦後日本の出版メディア界を牽引した岩波茂雄の文章を収録するこの 3 冊においては編者としてかかわるほか、第 3 巻では解説も執筆し、メディア文化にかかわる当該研究の成果の主軸をなすものといえる。『毎日新聞』(2017 年 4 月 2 日朝刊)の書評欄で大きく取りあげられるなど、一定の評価を得たように見える。

2017 年度は、その研究実績の主たるものを、活字発表と口頭発表にわけて主たるもののみ以下に示す。著書では共編著、Atsuko Ueda, Michael K. Bourdaghs, Richi Sakakibara, Hirokazu Toeda, *The Politics and Literature Debate in Postwar Japanese Criticism, 1945-52*, Lexington Books, pp.1-322, May 2017. を刊行した。共著論文については、Michael K. Bourdaghs, Cécile Sakai, Hirokazu Toeda, "Introduction: Kawabata Yasunari in the twenty-first century," *Japan Forum*, Volume 30 Issue 1, pp.2-11, March 2018. を発表した。招待講演では、"Japanese Literature and Two Systems of Press Control: The Intersection of Home Ministry and GHQ/SCAP Censorship During the Occupation Period," The University of British Columbia, November 9th, 2017. がある。一方、研究発表では、「戦後日本文化再考」第 13 回研究集会(国際日本文化研究センター共同研究会(代表:坪井秀人氏) 2017 年 6 月 18 日、於・立教大学太刀川記念館ホール)にて、「占領期メディア規制と出版文化 プランゲ文庫と岩波書店での調査を中心に」というパネルテーマのもと、占領期に刊行された文芸雑誌『近

代文学』『新日本文学』『人間』等の検閲事例を挙げ、現在までの検閲研究の動向を示した。また、スーパーグローバル大学創成支援事業早稲田大学国際日本学拠点が主催した国際検閲ワークショップ「《若手研究者によるラウンド・テーブル》検閲と文学研究の現在」(2018年1月26日、於・早稲田大学国際会議場第三会議室)の企画を行った。

2018年度は、これまでの成果を踏まえ、カリフォルニア大学ロサンゼルス校などに出張し、ゴードン W. プランゲ文庫の資料調査と研究成果のアウトリーチの検討を重ねながら研究を展開した。2018年度も、帝国日本で行われていた内務省の検閲と占領期日本で実施されたGHQ/SCAPの二つの検閲に関する新資料を収集・整理し、新たな研究の国際的な基盤を形成した。関連する研究成果として、プリンストン大学・シカゴ大学・早稲田大学の研究者たちとの共同研究の成果、Atsuko Ueda, Michael K. Bourdaghs, Richi Sakakibara, Hirokazu Toeda, *Literature among the Ruins, 1945-1955: Postwar Japanese Literary Criticism*, Lexington Books, May 2018. を上梓し、論文“From the God of Literature to War Criminal: The Media and the Shifting Image of Yokomitsu Riichi from Prewar and Wartime to the Postwar Era,” (pp.177-190) を寄稿した。また、2017年に刊行した共編著 *The Politics and Literature Debate in Postwar Japanese Criticism, 1945-52* のペーパーバック版も出版された。この二冊は、国際的波及効果を持つと考えられる研究成果である。さらに、2018年1月に開催した国際検閲ワークショップの成果をまとめ、尾崎名津子・金ヨロンとの共編著『言論統制(仮)』(花鳥社)を2019年度中に刊行する予定である。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計10件)

十重田裕一「二〇一四年秋、パリ、国際シンポジウム」『日本近代文学』第92号、日本近代文学会、2015年、pp.153-158

十重田裕一「せめぎ合う占領期事前検閲と改造社文芸出版 一九四五-四六年・横光利一『旅愁』を中心に」『日本文学』第749号、日本文学協会、2015年、pp.54-64

十重田裕一「占領期メディア検閲と横光利一『旅愁』 プランゲ文庫所蔵の校正刷からの視点」『文学』第17巻6号、岩波書店、2016年、pp.276-290

十重田裕一「植民地を描いた小説と日本における二つの検閲 横光利一『上海』をめぐる言論統制と創作の葛藤」紅野謙介他編『帝国の検閲 文化の統制と再生産』プルン歴史社(韓国語版)、2016年、pp.147-177

十重田裕一「占領期日本の検閲と川端康成の創作 「過去」「生命の樹」「舞姫」を中心に」『川端康成スタディーズ 21世紀に読み継ぐために』笠間書院、2016年、pp.193-203

十重田裕一「占領期メディア検閲と横光利一『旅愁』 プランゲ文庫所蔵の校正刷からの視点」『文学』第17巻6号、岩波書店、2016年、pp.276-290

十重田裕一「引き裂かれた「旅愁」の軌跡」『旅愁 上』岩波書店、2016年、pp.561-579

十重田裕一「回顧三〇年の時代」『岩波茂雄文集 第三巻』岩波書店、2017年、pp.319-334

Michael K. Bourdaghs, Cécile Sakai, Hirokazu Toeda, “Introduction: Kawabata Yasunari in the twenty-first century,” *Japan Forum*, Volume 30 Issue 1, pp.2-11, March 2018.

Hirokazu Toeda, Atsuko Ueda, “From the God of Literature to War Criminal: The Media and the Shifting Image of Yokomitsu Riichi from Prewar and Wartime to the Postwar Era,” in Atsuko Ueda, Michael K. Bourdaghs, Richi Sakakibara, Hirokazu Toeda, *Literature among the Ruins, 1945-1955: Postwar Japanese Literary Criticism*, Lexington Books, pp.177-190, May 2018.

[学会発表](計3件)

Hirokazu Toeda, “The Struggle between Censorship and Literature in Occupation-Era Japan,” *New Perspectives on Early Postwar Japanese Culture*, The University of Chicago, November 14th, 2015.

十重田裕一「津田左右吉と岩波茂雄：二つの言論統制と対峙して」国際シンポジウム「人文学の再建とテキストの読み方 津田左右吉をめぐる」2017年1月14日、早稲田大学小野梓記念講堂

十重田裕一「闘ぎ合う占領期雑誌とメディア検閲 『近代文学』『新日本文学』『人間』の事例を中心に」、国際日本文化研究センター「戦後日本文化再考」第13回研究集会、2017年6月18日、立教大学

〔図書〕(計6件)

Cécile Sakai・紅野謙介・十重田裕一・Michael Bourdaghs・和田博文編、『川端康成スタディーズ 21世紀に読み継ぐために』笠間書院、2016年、pp.1-310

植田康夫・紅野謙介・十重田裕一編『岩波茂雄文集 第一巻』岩波書店、2017年、pp.1-420

植田康夫・紅野謙介・十重田裕一編『岩波茂雄文集 第二巻』岩波書店、2017年、pp.1-347

植田康夫・紅野謙介・十重田裕一編『岩波茂雄文集 第三巻』岩波書店、2017年、pp.1-317

Atsuko Ueda, Michael K. Bourdaghs, Richi Sakakibara, Hirokazu Toeda, *The Politics and Literature Debate in Postwar Japanese Criticism, 1945-52*, Lexington Books, pp.1-322, May 2017.

Atsuko Ueda, Michael K. Bourdaghs, Richi Sakakibara, Hirokazu Toeda, *Literature among the Ruins, 1945-1955: Postwar Japanese Literary Criticism*, Lexington Books, May 2018.

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。